ン，36 個を対中国）で十分であることを強調した．さらに，メガトン級の核兵器は必要なく，100 キロトン程度で十分であり，先の核実験（1998 年）でそれが十分確立できたため，更なる核実験は必要ないとの認識を示した．

第二に，なぜインドがこのような核兵器能力を保有しなければならないのかについて，氏は，パキスタンが核兵器の「先制使用（first use）」を放棄しないことを挙げた．

第三に，対中国に対しては，5000 キロメートル級の弾道ミサイル開発には至っていないが，中国のダムへの攻撃による深刻な洪水によって抑止が可能であるとの見解を示した．

最後に，氏は，核兵器国による核の傘を放棄すること（日本を含む）が核軍縮の推進にとって必要であること，また，氏が小渕首相（当時）と面談した際に，インドを「ヒロシマ・ナガサキ」には絶対にしないことを誓ったと強調したことが印象に残った．

おわりに

紙幅の関係で，今回の現地調査の全てを網羅できなかったが，米印原子力協力協定締結後のインド核問題の現状が少しでも伝われば幸いである．今後も，インドの核問題についての研究を一層深めて参りたい．

ベトナム人の家への招待

山　川　篤　子 *

2010 年 11 月からおよそ 4ヵ月半，語学研修も兼ねて私はベトナムのハノイに滞在した．大学時代にベトナム語学科生だった私は，大学院に入るまでにすでに 3 回にわたってベトナムに渡航していた．ただ，これまでの滞在は観光や資料集めが目的で，2 週間以内の短期の滞在だったため，ベトナム人の生活を身近に感じることはなかった．したがって，今回のベトナムでの長期間滞在は，異文化を体験できる，期待の膨らむものだった．ベトナムは長い間中国の支配下にあったため，中国文化の影響が強く，日本と似た文化が他の東南アジア諸国より多いようにみえる．しかし逆に似ているからこそ，日本文化と異なる点が目につきやすい．現地でしばしば他の日本人留学生と，日本と似ている点・違う点について話をすることがあった．

フィールドワーク便りを執筆するにあたっ

* 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科

て，ベトナムでの生活を思い返してみると，ひとつの疑問に思い当たった．それは「ベトナム人はなぜ頻繁に人を家に招くのか」ということである．人を家に招くことは珍しいことではないが，ベトナム人のそれは日本と比べ頻度が高いように思えた．他の国々の事情を知らないので，ベトナム特有の文化とまではいえないかもしれないが，私の日本での経験からすると多いように思う．私の実家も人の出入りの多い方だが，それと比較してもやはり多い．日本では外国人と親しくなったからといって，すぐに家に招くという文化はあまりないように感じる．むしろ観光名所を案内したり，一緒に繁華街へ遊びに行ったりすることの方が主流である．日本では，たとえば家が世界遺産などの名所の内部・周辺にある，人を呼びたくなるほど立派または新しい家である，何かの行事や祭りがあるといったことが人を招く誘因になる場合がある．しかしベトナムの場合は，これらは人を呼ぶ第一の要因とはならない．

「ベトナム人が人を招くのは親しみの証拠である」と，ベトナム人の友人が教えてくれたことがあった．ベトナムでは，親しくなった人と家で共食するということが風習となっているのだろう．ただ，私が外国人で物珍しいということもあるためか，会ってからそれほどたたない人でも夕食に招いてくれることがあった．調査のため国立公園周辺の家やレンジャーの駐留所を訪問した際に，ただ立ち話をしていただけだったにもかかわらず招いてくれることがあった．また自身の研究のため，失礼な質問をすることもあったが，気にするどころか，むしろ何度も家に遊びに来るように言ってくれた．また何百キロも離れた実家に呼ばれることも少なくなかった．私には，親しみの他に，ベトナム人には「招きたがり屋」の傾向があるように思えた．

もうひとつ家の存在を意識することがあった．それは忘年会などの宴にも家を使うことである．前述の友人は，宴はレストランやベトナムの居酒屋のような場所で開くこともあり，特別家が多いわけではないと言っていた．しかし家に皆が集まるのは，親しい間柄であるからだとも言っていた．私は研究のためベトナムの森林研究所にいたが，その間に，月 1 回程度，誰かの家に集まることがあったものの，どこかのレストランで夕食をともにするということはなかった．確かに研究所が主催する新年会などの公式的なパーティーは家ではなく，研究所で行なわれていた．しかし，それ以外の宴は全て家で開かれていた．また家での飲み会には，たいてい 20～30 人くらいの人が集まり，それも顔見知りの人が多い．また出席者が家族を連れてくることもあった．これほどの人数が家に集まることは日本では珍しいのではないだろうか．このように，人を家に招くことはベトナムでは珍しいことではないようにみえる．私には，ベトナム人にとって人を家に招き，共食することが何か特別な意味をもっているように思えた．

家によく招くのであれば，その理由は家に存在するように思える．しかし家に何か特別なものがあるのか，というと特に何もない．珍しい，美しい環境も，みせるべき家宝もあ

写真 1　夕食の様子

るわけではない．招かれた者は，夕食の準備ができるまで家の者や他の来訪者と会話を楽しんだり，家の周辺を散歩したりする．私は夕食作りの手伝いをしたり，散歩をしたりすることが多かったが，招かれた方にはゆっくりとした時間が流れる．夕食ができると皆で円になって食べる．家で開かれるパーティーも個人的に家に呼ばれた時と基本的には同じである．仕事が終わってからそれぞれがみんな家に出向く．準備ができるまでは男の人は輪になって話をしていたり，先に小宴会を始めていたりする．女の人は食事の準備をしながら世間話をしている．準備ができてからは，主催者が挨拶をし，互いに乾杯をし，食事をとる．食事が進むと酒をもってまわって色々な人と話をしたり，再び乾杯をしたりする．このような宴は，世間話をしながらも，仕事のことについて語ったり，社会的な問題を話したり，情報交換や交流の場となっている．

写真 2　夕食の準備に忙しい様子

家に招くのは家や周りの環境をみせるためではなく，家に集まることで互いに情報を共有し，関係を強化するためのように思われた．

次に家で出される料理についてみてみる．もてなされる料理は毎回異なり，招待用の決まった形式があるわけではない．ただ，何度か鍋料理が出されることがあった．鍋料理はもてなしの際に出される定番料理のひとつだそうだ．その理由は沢山の種類の食べ物を皆で共食することができるからである．ベトナムの鍋料理は日本と同じように野菜をまず入れ，その後キノコ類や魚介類，肉類を入れ，最後に麺類でしめる．しめにご飯を用いることはない．また使う野菜の種類が多いことや魚介類を多く用いることなど若干の異なる点はあるが，皆でワイワイと鍋をつつく雰囲気は日本と同じである．鍋ができると最初に，招いてくれた人あるいは家の主人から接待客への挨拶があり，みんなで乾杯をしてから食べる．さらにベトナムでは，食べる前に，各人が，家の人，周りの友人に「戴きます」と一言述べてから食べ始める．基本的に自分で欲しいものを取って食べるのだが，ベトナムでは，参加者があまり食べていないようにみえたり，偏ったものしか食べていなかったり

すると，近くの人や主催者などから皿に料理をどんどん入れられてしまう．鍋奉行だけでなく，主催者はとにかく皆が十分に食べられているかに気を配る．

鍋の他には，その地域の特産を用いた料理や一般的な家庭料理がふるまわれることもある．家庭料理では基本的にご飯，肉あるいは魚料理，野菜料理，汁物が 1 セットで必ずあり，それに豆腐や芋，春巻き，卵料理，お粥などが付くこともある．また肉や魚料理，野菜は 2 種類以上であることが多い．料理は大皿に盛られており，それを皆で囲む．人数が多いとバラバラに置いてあることもある．テーブルで食べることもあるが，大勢の場合だとござを敷きその上で食べる．ここでも十分に食べているかと聞かれ，十分に食べていても，必ずもっと食べなさいと勧められる．空腹ではないかと常に気づかわれ，嫌というほど十分に食べたかと聞かれる．ご飯は茶碗 1 杯で済むことはなく，2 杯以上食べないと，皆からブーイングが出る．そのため，私は最低でも 2 杯は食べるようにしていた．これは宴だから，私が外国人だからという理由で勧めているのではない．食べない者に対して，客同士，家族同士，互いに食べるよう勧めるのである．ベトナム人の食に対する関心は非常に高い．

ベトナムの料理はおいしい．ベトナム料理は種類が豊富だが，ベトナム料理が日本人の口に合わないということはごく稀なことだ．食事を出されて口に合うかと毎回聞かれ，その度に美味しいと答える．「日本人はお世辞をよく言うから本当のことを言って良いのだよ」

写真 3　鍋料理

と言われたこともあるが，日本人にとって口に合わないことは本当に稀である．特に家庭料理に関してはそうである．料理に関してはベトナム人はみな自信をもっている．用いる食材の内容や新鮮さ，栄養面にも気を配っている．味付けや組み合わせに関して，料理をしている時や食事をしている時など，どうすればより美味しくなるかと意見を言い合ってることが多かった．食に対する関心が高いからか，自分たちの料理に誇りをもっているからか，食をともにするということはベトナムでは大事なことなのである．そしてこれが家に招く要因となっているように思える．

レストランや居酒屋ではなく家を宴の場とするのは，公式的すぎず気楽に居られ，その温かい雰囲気により会話が弾み，互いの信頼を高められる場となっているからだと思う．家への招待は，親しみの証であると同時に，さらなる関係の構築にも役立っている．招くことを通して互いに共通の時間をもち，打ち解け，信頼し合うことができる．そして，ベトナム人の好奇心旺盛な態度や，食に対するこだわりが，客を家に招くことにつながって

いるのであろう．つまり，この招くことこそがベトナム人の重要な社交方法になっている．家は，ベトナム人にとって社交性を促す大事な場所なのである．

ドナを葬る

溝　内　克　之*

「ドナが，別の世界に行ったよ」

午前4時．その電話を受けたのは，調査村から近い街の安ホテル．電話をかけてきたのは，村でお世話になっている家族の「お父さん」アロボ．ドナの兄弟だ．その電話が，「ドナが死んだ」という連絡であることを理解することは，容易ではなかった．ほんの数週間前に，ドナの婚約者の実家へアロボや長老たちと一緒に結婚の許しを乞いに行ったばかりだったからだ．その時には，ドナが特に大きな病気を患っているようにはみえなかった．小学校で教師をしているドナは，「お前の仕事はどうだい？」と私の調査の進捗をいつも気にかけ，ご自慢のホンダのバイクでいろいろな場所に連れて行ってくれた．私を家族の一員のように接してくれた「お父さん」のひとりだった．

数十分後に病院にたどり着くと，アロボが「冗談みたいだな」と言って迎えてくれた．付き添いのアロボを除くと，私が最初に駆けつけた「家族」だった．アロボによると，数日前，体調を崩したドナは村の近くの病院に運び込まれ治療を受けたが，容態が悪化．昨晩，街の大きな病院に移されたものの治療の甲斐なく，あっという間に亡くなったという．街の病院へと移る時には，婚約者と正式な結婚に先だって生まれた赤ちゃんに，ドナ本人が「心配するな．大丈夫」と話したという．誰も予想しなかった死だった．私も「まさか今回の調査がドナの死によって締めくくられるとは…」と困惑するしかなかった．

村住まいの調査．それは，ただ決まった質問をするだけではなく，自らの体を使って村の人々の生活を学ぶ過程でもある．酒場で地酒を飲み，村の生活にとって酒とはなにかを学ぶ．バケツで近隣の世帯に水をもらいに行き，近所づきあいを知る．しかし，実際に自らが体験できないことも多い．当然のことだが「死」もそのうちのひとつだ．「死」は，調査者だけではなく，すべての人に体験し誰かに伝えることを許さない．だからこそ，人々は「死」とどのように向き合うかに

* 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科